

戦記文學

五十嵐 力

一

尙武の國、さむらひの國、日本の戰爭に關する文學を、わづか二十枚の中に煎じつめるのは、奇蹟にも似たる一種のくしわざであらう。

我が國の戦記の萌芽は、まづ『古事記』『日本紀』等の大古典に於ける武器の名稱に見え始めた。つづいてそれらの古典の間に、他の記事と相並べて挿入された戰爭の記事に於いて、その引きつゞいた活動の姿を現はした。戰爭がその顛末を記した獨立の一篇として、始めて纏まつた書物の姿を見せたのは、平安朝、朱雀天皇の御代に出でた『將門記』である。『將門記』は平將門の滅亡後四ヶ月目の

天慶三年（紀元一六〇〇年）の六月に出来たものと云はれる、

『將門記』は獨立した戰爭記ではあるが、漢字だけで書かれた準漢文ともいふべく、せいと漢文まがひの國文といふべきものであつたが、戰爭記が純なる國文の姿を具へ、かねて武人といふ新興階級の特別な心意氣を見せたのは、白河天皇の承暦元年（紀元一七三七年）以前に、源隆國が書いたと考へられる『今昔物語』の卷二十五である。この一卷は處々に鎌倉時代の戰記の趣をも見せたものであつたが、それは『今昔』三十一卷の中のたゞの一卷で、その一卷はまた多くの武人の逸話を書いた離れ／＼の十二章から成るものであつた。

戰記が始めて一つの戰爭のみを寫した獨立の一篇を成し、のみならず純なる國文を以て武人特殊の意氣と活動とを寫したのは、鎌倉時代である。しかも此の時代には、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』（『源平盛衰記』を『平家物語』の異本の一種を見て）といふ三大雄篇が、源頼朝の死後間もなき建仁頃（紀元一八六一年）から後深草天皇の建長頃（紀元一九〇九年）に至る四十餘年の間に引きつゞいて現はれたので、此の時代は長く我が戰記文學の最盛期とも、本場とも見られることとなつた。

この三篇の大戦記に次いで、彼等と光を争ふ戦記の出でたのは、後村上天皇の興國の末年頃（紀元二〇〇四年）から長慶天皇の建徳二年頃（紀元二〇三一年）までの間に纏められ、小島法師の作と稱せ

られる『太平記』である。

『保元』、『平治』、『平家』及び『太平記』の四篇は戦記文學の名を獨占するほどの傑れた作で、戦記文學といへば、まづ此の四篇の事と、學者からも世間からも思はれて居るほどに重要なものであるが、其の常識からも推察される如く、『太平記』以後の我が戦記文學史は甚だ寂寥たるものであつた。室町時代から江戸の始めにかけて、『曾我物語』、『義経記』、『明德記』、『應仁記』等を始めとして、大小百數十篇或は遙かにそれ以上の戦争記が出来たであらうが、『平家物語』や『太平記』を見た目に、戦記の文學と思はれる作は殆ど無かつた。その間に在つて、文章が荒削りで洗鍊を缺き、材料の均衡鹽梅や、記述の聯絡統一などが頗る粗雑なるにかゝはらず、一種の迫力を以て人を魅する所のあるのは、共に太田和泉守牛一の輯録した資料を小瀬甫庵が整理したと云はれる『信長記』及び『太閤記』であるが、その後江戸時代に續出した『太閤記』、『甲越軍記』、『眞田三代記』等の、浩瀚な合戦記は、いづれも俗受け本位に書き流したもので、概ね文學の名に相應しからぬものであつた。

明治、大正から昭和にかけては戊辰の役、西南の役、日清戦争、日露戦争から降つて現に戦はれつつある支那事變に至るまで、大義によつて國運を賭したる意義深き大戦争が次ぎ／＼に戦はれ、之れを寫した戦記も、例へば田山花袋氏の『従征日記』、櫻井忠温少將の『肉弾』、水野廣徳大佐の『此一戦』

など數多く現はれたが、寫された事件が大きく意義深きにか、はらず、まだ遡つて『平家物語』や『太平記』と雄を競ふやうな名篇大作が現はれぬかのやうに見える。

二

以上は目ばしい名作を境界として、我が戦記文學の歴史を極めて大まかに區劃したものである。之れによると、我が戦記文學史は、文書に於ける戦争現象の存在を標準として見れば、神代以來今日までの數千年に亙るといふことが出来るであらう、獨立した戦記の出現に起算の目安をおけば『將門記』の出來た天慶三年から現今に至る一千年の歴史を持つといふことも出来るであらう、立派な國文の獨立戦記を持ったのを標準とすれば『保元物語』の出來た建仁頃から今日に至る七百數十年と見ること出来るであらう。また世間の常識が示す如く、『保元物語』から『太平記』に至る、名篇出現期のみを指すとすれば、我が戦記文學史の天下晴れて廣く許さるゝ繼續期間は『保元物語』の建仁期（紀元一八六一年）から『太平記』の建徳、應安（紀元二〇〇四年）に至る、わづかに百四十餘年間となるであらう。我が戦記文學史は價值標準の置き方によつて、此の通りいろ／＼に見られるのであるが、吾等は上記の略説を具體化する爲めに、左に代表名作數篇の文例を掲げて簡單な説明を加へようと思ふ。

『將門記』は『古事記』などと同じく、全篇漢字で書かれてあるが、まことは漢文脈と國語の雅文脈、俗文脈とが、あやに絡んだ雜駁なもので、むしろ不純なる國文といふべきものである、吾等は原形の爰將門欲罷不能、擬進無由。然而勵身勸據、交又合戰矣。將門幸得順風、射矢如流所中如案。扶等雖勵、終以負也。を、讀下し式に改めたる

爰に將門罷めんと欲するに能はず、進まんとするに由なし。然り而して身を勵まして勸み據り、又を交へて合戰す。將門幸に順風を得、矢を射ること流るゝが如く、中るところ案の如し。扶等勵むと雖も、終に以て負く。

とを比較することによつて『將門記』が漢文或は國文の名手によつて書かれたものではなく、その表現は極めて不純雜駁であるが、その不純雜駁なところに、一種の生氣迫力を發揮して居ることを見出すことが出来るであらう。

『將門記』の叙述の最も優れたところは、合戦の部分よりは、寧ろ將門の亂の及ぼした影響を記述し

た部分である。左は叛軍猖獗の報が傳はつて京都の動搖するところであるが、これまでになると雜駁なる文章にも悔るべからざる威力があつて、此の戦記の祖文に意外の貫祿を添へて居ることがわかる。

偏へに此の言を聞き、諸國の長官魚の如くに驚き、鳥の如くに飛び、早く京洛に上る。…仍つて京官大きに驚き、官中騒動す。時に本天皇十日の命を佛天に請ひ、その内に名僧を七大寺に屈し、禮奠を八大明神に祭り、詔して曰はく、忝くも天位を膺け、幸に鴻基を纂ぐ。而して將門濫惡を力と爲し、國位を奪はんと欲すてへり。昨此の奏を聞く、今必ず來らんとせん。早く名神に饗して、此の邪惡を停め、速かに佛力を仰ぎて、彼の賊難を拂へと。乃ち本皇、位を下り、二掌を額上に攝げ、百官潔齋して、千祈を仁祠に〇す。況んや復た山々の阿閼梨は、邪滅惡滅の法を修め、社々の神祇官は、頓死頓滅の式を祭る。一七日の間に焼く所の芥子七斛有餘、供ずる所の祭料五色幾ばくなり。惡鬼の名號は火壇の中に焼かれ、賊人の形像は棘楓の下に着けらる。五大力尊は侍者を東土に遣はし、八大尊官は神鎗を賊の方に放つ。而る間天つ神は嘸織みて賊類非分の望みを誇り、地類は呵嘖して、惡王不便の念を憎む。

京都の上下僧俗が總動員して逆賊退治に狂ひ立つて居るのと同じやうに、文章も亦和、漢、雅、俗の協力總動員で、此の京洛震撼の實狀を寫し出ださうとして居るかのやうで、とにかく一種の奇怪なる日本特有の文章美である。

四

『今昔物語』の卷二十五は、戦記文學の方から見ると、此の一卷を引離して獨立した一部の戦記としたいやうな部分である。いかに時代を代表した大作でも『今昔』の傘下に從屬せしめるのが惜しまれるやうな、重要な特色を持つた卷である。それは短篇十二章を束ねた一卷で、前なる『將門記』に對しては、將門記が公卿時代の最盛期に於ける暴慢なる野心家の非望と失敗とを寫したのに對して、新たに勃興しかけた武人階級の發祥當時に於ける力強き若芽の萌え出づる姿を描いたものであつた。後なる鎌倉の戦記に對しては立派な先驅として、未完成ながら力強き祖先の姿を見せたものであつた。『今昔』の此の卷の『平家』等に對する關係は、譬へば頼義、義家の清盛、頼朝に對する關係のやうなものであつたであらう、それは人物や思想の對峙關係に於いてのみならず、文章の對峙關係に於いても全く同一であつた。左は前九年の役に於いて源頼義、義家等が賊魁安倍貞任等に對する難戦苦闘の一節である。

而る間、守しゅ(將軍頼義)の兵或は逃げ、或は死にぬ。纔かに殘る所六騎也。男義家、修理少進藤原景道、太宅光任、清原貞廉、藤原範季、同じき則明也。敵は二百餘騎也。左右より圍み攻めて、飛ぶ矢雨の如し。

守の乘馬矢に當たつて斃れぬ。景道馬を得てこれを與ふ。義家が馬亦矢に當たつて死にぬ。則明敵の馬を奪つて此れを乗せつ。此くの如く爲る間、殆んど脱れ難し。而るに義家頻りに敵の兵を射殺す。亦光任等死にに死にて戰ふに、敵漸く引いて退きぬ。其の時に守の郎黨散從佐伯經範は相模國の人なり。守専らに此れを憑めり。軍破れける時に、經範圍み漏らされて、纒かに出でて、守の行ける方を知らず。散りたる者に問ふに、答へて云はく、守は敵の爲めに圍まれて、從兵幾ばくもあらず。此れを思ふに、定めて脱れむ事難しと。經範が云はく、我れ守に仕へて三十年、既老に至る。守亦若き程にあらず。今限りの剋に及んで、何ぞ同じく死なざらんと。其の隨兵兩三騎亦云はく、君既に守と共に死なむとて敵の陣に入りぬ。我等豈に獨り生かんと云ひて、共に敵の陣に入りて戰ふに、十餘人を射殺して、其等も敵の前にして殺されぬ。また藤原景季は景道が子也。年二十餘にして、敵の陣に馳せ入つて、敵等を射殺して返ること七八度も。遂に敵の陣にして馬斃れぬ。敵等景季が武勇を見て惜しむと云へども、守の親兵たるに依つて殺しつ。此様に爲る間、守の親しき郎等ども皆力を發して戰ふと云へども、敵の爲めに殺さるゝ者其の員あり。亦藤原茂頼は守の親しき者也。軍破れて後數日、守の行く所を知らず。既に敵の爲めに討たれにけりと思ひて、泣く／＼我れ彼の骸骨を求めて葬りせん。但し軍の中には、僧に非ずば入り難しと云ひて、忽ちに髮を剃りて、僧と成りて戰の庭を指して行く。道に守に値ひぬれば、且つは喜び且つは悲しんで守と共に返す。

云はゞ『將門記』を漢文要素の少ない假名交り文にして、一步鎌倉の戰記に近づけたやうなものであ

るが、戦に勇む心魂こころたましひと主従金鐵の契りとが力強き調子に表現されて居るところを見ると、鎌倉戦記の精髓が、内容に於いても、表現に於いても、もう立派な書姿を現じて居ると云つてもよいのである。

五

『將門記』から『今昔物語』まで約そ百三十年、『今昔物語』から『保元物語』までまた約そ百三十年、而して前の百三十年は、時代はづれの我武者ら戦争を、新興階級の意義深き戦争とし、突發的な場あつたりの文章を立派な發展性を持つ若芽の如き文章としたが、後の百三十年は、同じ系統のおぼこ思想を堂々たる大人おとなの思想たらしむると同時に、同じ形式の幼稚なる文章を老成完備の文章たらしめたかの觀がある。言ひ換へれば『今昔物語』の第二十五卷の蓄は、百三十年間の生育はぐくみによつて鎌倉戦記の燎亂たる花と開いたのであつた。而して保元、平治から平家の滅亡に至るまでの歲月と、その後に於ける回顧沈潜の二三十年とが、『保元物語』をして『平治物語』たらしめ、次いで『平家物語』たらしめたのであつた。

とにかく『保元物語』は久しく眠つた武人の目を覺まして、その實力を自覺せしめた。同時に彼等を時代の槍舞臺に押し登せて、思ふまゝに其の優れた武藝を演せしめた。彼等が王朝の公卿に代はり

思ふまゝに實力を發揮して戰場を驅けまはつたけなげなる活躍振を明快壯烈に寫したこと、是れが鎌倉の軍記の花やかな一面の特色である。時代に見離され、競争に負けた戦敗者の悲哀、委しくいへば藤原氏、源氏、平家と交互して、榮えた者の亡び行く哀れな姿を、寂しく美しく寫したこと、これが鎌倉の軍記の淋しい他の一面の特色である。而してまた極度の榮華と極度の衰滅とを對照せしめて、限りなき斷腸の哀音に歌ひ出したこと、これが『平家物語』の『保元物語』、『平治物語』より優れて居るのみならず、古來のあらゆる戦記より遙かに優れて居る所以である。

吾等はまづ、『保元物語』に於いて、俯伏したる武人の始めて首を揚げた姿を見るであらう。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角めかど二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て、獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍はちりゅうといふ鏡を似せて、白き唐綾を以て緘せましたる大荒目の鏡、同じく獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀たちに、熊の皮の尻鞆しつぽん入れ、五人張りの弓、長さ七尺五寸にて、鉞つば打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體てい、契けい喰くもかくやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず、されば堅陣を破ること、吳子孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔くる鳥、地を走る獸けもの、恐れずといふことなし。上皇を始めまのらせて、あらゆる人々、音に聞こゆる爲朝見んとて擧こり給ふ。左府即ち合戦の趣はからひ申せと宣ひければ、畏かしこつて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども従へ候について、大小の合戦數を知らず、中にも折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍ま

れて強陣がうじんを破り、或は城を攻めて敵を亡ぼすにも、皆利を得ること夜討ようちに如くこと侍らす。……

新しい戦亂の世が無位無官の青年英雄を歴々の公卿の前に、のみならず畏れ多くも上皇の御前に引出だしたのである。而して彼れをして傍若無人に夜襲の謀を献せしめたのである。戦記の作者が此の青年武人の軍裝束を詳記し、剩へ樊噲、張良、吳子、孫子、養由等唐土の豪傑と比肩せしめたのは、武力實力に目ざめた時代の暗示によるのであらう。

この時代の寵兒は、やがて大弓を持ち、一騎當千の郎等を引き連れて陣頭に立つた。而して鎌田正清をして「雷電などの落ちかゝらんは、事の數にも候はじ」と驚歎せしめるやうな烈しい軍立いくさたちをして、敵身方の目をそば立たしめた。

他の源平の武人等も、爲朝にこそ及ばざれ、それ〴〵新興武人の名に恥ぢぬ働きを見せたが、時代後れの淋しさを見せたのは藤原氏を中心とした公卿達で、殊に藤原頼長を始めとして敗殘者の哀れさは言語に絶してゐた。頼長は焼け落ちる白河殿を遁れ出づる早々、流矢を頸に受けて、重態を昇あかれつゝ、宇治から奈良までさまよひ落ちたが、彼れを溺愛した父の忠實にも最後の對面を拒まれて、舌の先を噛み切り、奈良のさる僧坊に近き小屋の中で、淋しく最後の息を引取つた。作者は其の時に於ける頼長の父關白忠實の悲しみを、左の如く寫して居る。

哀れ取りも替はるものならば、忠實が命に替へてまし。悲しきかな、蘇武が胡國に赴きしも、再び漢家萬里の月に歸り、阮君が仙洞に入りしも、秦室七世の風に歸りき。頼長一たび去つて、再會いづれの時を待たん。かひなき命だにあらば、縱令不返の流罪に行はるとも、忽ちに失はるゝことはよもあらじ。若し東國に謫居せば、津輕や蝦夷の奥までも、遠路を凌ぎて駒に鞭をも打ちてまし。もし西海に左遷せられれば、鬼界が鳥の果までも、船に棹をも指すべきに、行きて歸らぬ別かれほど悲しきことはなきぞとよ。計らざりき是れほどに、老いの心を惱ますべしとはとて、御涙をせきあへさせ給はぬを見奉るも哀れなり。

六條判官爲義が自訴を決意して子達に別かる、折の記述には、

東雲やうく明け行きて、鳥の懸々告げ渡り、峰の横雲晴ければ、入道「疾く何方へも落ち行くべし」と宣ひて、都の方へ行き給ふを「暫らく御待ち候へ、申すべき事候」と聲々に申せば、何事にやとて立ち歸り給へば、前後左右に立ち圍みて、泣くより外の事ぞなき。

など書きつづけて、更に悲しいものがある。

『平治物語』は『保元』と同じ作者の筆に成つたものであらう、結構から筆致まで、そつくりと云つてもよい程に類似して居るが、主なる興味を大別すれば、『保元』と同じく、やはり壯烈なる合戦振と戦後に於ける敗殘者の哀れな身の上話とで、その二つとも『保元』以上に筆の老熟を見せて居るやうに見える。合戦の中の第一は、待賢門に於ける源平の嫡々惡源太義平と平重盛との爭覇戦で殊に戦前に

於ける重盛が味方を激勵した名文句の

重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんと、何の疑ひがあるべき。誰れか爰に樊噲、張良が勇みをなさざらん。

の如きは、ナポレオンが埃及遠征の折に、大ピラミツドの前で「四千年は汝等を瞰下しつゝあり」と云つて、士卒を激勵したのに比べて、優るとも劣らぬものであらう。義平が鎌田兵衛と主従二騎で、重盛が與三左衛門景安、進藤左衛門家泰等郎等二人と逃げ行くのを追つかけて激しく戦つた後、重盛が郎等二人を討たれて辛うじて、逃げる所を

重盛は戀み切つたる景安討たせて、命生きて何かせんとて、既に惡源太と組まんとせられるを、進藤左衛門馳せ來り「家泰が候はざらん所にてこそ、大將が御命をば捨て給ふべけれ」とて、我が馬を引き向けて中に隔てゝ、惡源太とむすゝと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を討たせては叶はじと思ひければ進藤左衛門に落ち重つて、首を搔く。此の間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。

と寫して居るが如きは、叙述の妙技の外に武士道の床しき眞りを見せて、讀者をして驚嘆、景仰、感激の念を起こさしむるものがある。

六

『平家物語』は前代の戦記の殆んどあらゆる長所を兼ね備へて、之れを精練向上せしめた上に、前代の戦記の持たない獨創をも持つてゐた。おもなる一段々々に立派な組織を與へて居る上に、全體として更に高級なる組織を持つてゐた。勇壯なる戦闘要素と無常必衰の悲哀要素とを、それ／＼巧妙に描寫した上に、二者を有機的に絡んで、何とも云へぬ深い美しい人生の姿を見せた。『保元物語』に芽ぐみ『平安物語』に於いて少しく發達した七五本位の律語の調子を散文の要素に馴染ませて、我が國の散文界に未曾有の美しい調和の文體を出現させた。吾等はたゞ『平家物語』の持つ是等の長所について詳しく語り得ざることを憾みとする。

『平家物語』を繰返して讀んだ者に取つて、開卷早々に吾等を打つものは、最初の和讃今様がかつた數句である。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。驕れる者も久しからず。たゞ春の夜の夢の如し、猛き人も遂には亡びぬ、漏へに風の前の塵に同じ。

初めの四句は大體七五調であるが、その最後の「盛者必衰の理を顯はす」で、わざと七五の調子を破

つて、目立たぬやうに、次ぎの散文句につゞけて居るのは、實に驚くべき妙手段といふべきであらう。『平家物語』の文章は、大體此の調子に出来て居るので、此の冒頭の一鎖は『平家』全體に通じた文章の妙趣の鍵であると云つてもよい。また初めに歌ひ出された無常必衰の哀調が、妓王、佛、成親、俊寛、重盛、清盛、義仲を経て、遂に壇の浦から一門大路の渡されに及び、而して建禮門院の寂光院に於けるさびしい御往生を経て、最後に三位の禪師六代が斬られて、

平家の子孫は永く絶えにけり。

といふ哀愁無限の一句に終はる。而してその間には、名だけを擧げて、吾等が思出に奮ひ起つやうな富士川、宇治、瀬田、俱利迦羅、篠原、一の谷、八島、壇の浦等に於ける大小無数の勇ましい美しい合戦が鏤められて居る。これによつても、簡單に總括した吾等が右の短評の、必ずしも不合理ならぬことが頷かれるであらう。

『平家物語』の戦争記述は『保元』、『平治』二つの物語に類似したものはあるが、二つの物語に比べると、遙かに餘裕のある、そして美しい、淋しい味を持つたものである。

薩摩守は聞こゆる熊野育ちの大力、究意の早業にて坐しければ、六彌太を掴うで、悪い奴が、御方ぞと言はば言はせよかして、六彌太を捕つて引寄せ、馬の上にて二刀、落ちつく所で一刀、三刀までこそ突かれ

けれ。二刀は鏡の上なれば通らず、一刀は内甲へ突入れられたりけれども、薄手なれば死なざりけるを、取つて抑へて首を搔かんとし給ふところに、六彌太が董、後れ馳せに馳せ來て、急ぎ馬より飛んで下り、討刀を抜いて、薩摩守の右の肘を、臂の本よりとつと打落す。薩摩守今はかうと思はれけん、暫し退け最後の十念唱へんとて、六彌太を掴んで、弓長ばかりぞ投げ退けらる。その後西に向ひ、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と、宜ひも果てねば、六彌太後より寄り、薩摩守の首を取る。

與一鏑を取つて番ひ、よつ引いてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑は浦ひゞく程に長鳴して、あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉み二揉みもまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日のかゞやくに白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みつゆられけるを、沖には平家舷を叩いて感じけり。陸には源氏籠をたゞいてどよめきけり。

初めなるは薩摩守忠度の最期、後なるは那須與一の扇の的で、世に名高い段々であるが、生死の境を叙したものがら、悠揚として迫らざる筆致の落ちつきと美しき曲折とは、さすがに此の物語の作者なればこそと思はれる。

『太平記』は第一に『平家物語』を模範と崇めて、之れに作者が得意とした儒佛の知識を彩はして書いたものであるらしい。口調が壯快で、目もあやに文飾を用ひ盡くしては居るけれども、肩肘張つた人物達の掛合を極彩色の修辭でわざとらしく寫したやうな趣があつて、平家に見るやうな、しつとりした落着と、しんみりした味とを看ることが出來ぬのは遺憾である。

『太平記』に見る第一の興味は、鎌倉の末期から室町の初期にかけて、我が建國精神の危機に臨んだ前後の事情を力強く美しく寫した點にある。その興味を中心を更に限つていふと、建國精神の崩壊を支へた巨柱群の相次いで倒れた事實、彼等が肉に死して魂に生きた犠牲の物語を美しく傳へた所にある。かういふ點から見て楠公兄弟討死の條の如きは、其の作の中の最も優れた文章であらう。次ぎにその最後の一節を引いて見る。

正成正季また取つて返して此の勢にかゝり、懸けては打違へて殺し、懸け入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで戦ひけるに、その勢次第々々に滅びて、後は僅に七十三騎とぞ成りにける。此の勢にても、打破つて落ちば落つべかりけるを、楠京を出でしより、世の中の事、今は是れまでと思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて、機已に疲れければ、漆河の北に常たつて、在家の一村有りける中へ走り入つて腹を切らんために、鎧を脱いで我が身を見るに、斬創十一箇所までぞ負ひたりける。此の外七十二人の者共も、皆五六箇所三箇所を被らぬ者は無かりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に

二行に並居て、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて、抑も最期の一念に依つて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なると問ひければ、正季からくくと打笑つて、七生まで唯だ同じ人間に生れて、朝敵を滅ばさばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、我れも斯様に思ふ也。いざさらば同じく生を替へて、此の本懷を達せんと契つて、兄弟共に刺し違へて、同じ枕に伏しにけり。

かういふ處になると、作者が至誠の迸りが楠公一家の魂魄を甦らせて、此の一節を尊王愛國家の聖典たらしむるの概がある。吾等は前に、『太平記』は文學の趣味から見て遙かに『平家物語』に及ばぬと云つたが、建國精神に關する實際方面の勳功に關しては、此の記は他のいづれの作も及ばぬ貫祿を有して居るのである。

與へられた紙數がとくに盡きたので、遺憾ながら、こゝで此の小講の幕を閉ぢる。皇國の生んだ大無數の戰記を読み來たつて、有り難いといふ印象を吾等の心に殘すのは、『將門記』、『今昔物語』の卷二十五、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』及び『太平記』の六種である。その中から更に優れたものを示せとならば、吾等はまた悦んで、『平家』及び『太平記』の二作を擧げるであらう。